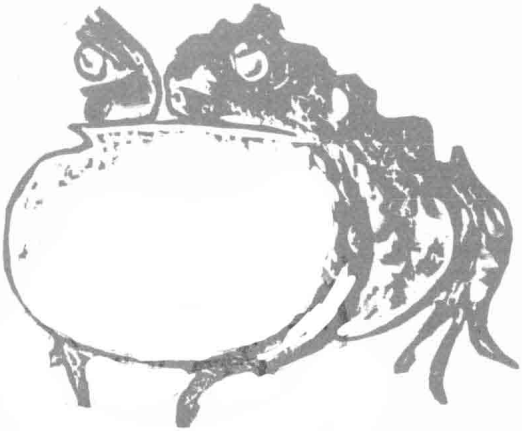
抱寝

和田芳恵

和田芳恵

抱寝



河出書房新社

抱寝（だきね）

©1975

著者　和田芳恵　装幀者　関野準一郎　発行者　中島隆之

昭和50年9月10日初版印刷／昭和50年9月15日初版発行

東京都千代田区神田小川町3丁目6番地　発行所　株式会社　河出書房新社

電話東京(292)3711(大代表)　振替東京10802

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

定価はカバー・帯にあります　落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

好みの弁当 7
抱寝 33
囃し詞 57
幼なじみ 81
猫もいる風景 105
老木の花 129
母の寝言 153
或物語の発端 177

抱寝

好みの弁当

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

啓助の妻は、いつものように隣近所の子供を集めて、お三時の揚物をしていて、急に死んだ。脳溢血であった。

三村の小母さんは襖でも外れたみたいに、ふわっと倒れたと、子供たちは駆けつけた家主に言うのだった。

「寛子さんらしい死にかただわ」

世話になった子供の母親は眼を泣きはらしていた。

油で煮えたぎるフライパンの柄を、手から離していたのは、そのとき、まだ、寛

子の意識があったのだろう。台所がせまいので、火がまわったら、手のつけようもなかった。白い割烹着をつけて、右手に長い菜箸を持ったまま、寛子は仰向けに倒れていた。最後にフライパンへ入れた材料は、焦げて黯ずんでいた。

「小母ちゃんのご供養に、ひとつ、召しあがれ」

隣りに住む左官屋の妻の房江は、揚げ残しも揚げ足した五色揚を大皿に盛って、茶の間へ運んできた。子供たちは円座をつくって、おいしい、おいしいとつまんでは食べた。

「小母さんは、このとき、倒れたのよ」

皿のなかに炭化した揚物がまじっていた。年嵩な女の子は、その黒い五色揚を、じゃりっと噛んで無理に呑み込みながら、死んだ寛子に可愛がられてきた、その日その折を思い浮べているらしかった。

三村の筋向いに住んでいる未亡人の笹田ふみ子は、

「近頃の子供は、めそめそしなくなりましたね。寛子さんは、からっと明るい人で

したもの、こんなに喜んで戴いたら、さぞ、満足でしょうよ」

と、皮肉まじりに言って、子供たちを見まわした。糸のついた針を襟もとへ刺したままのふみ子は和裁の内職をしていた。

子供たちは、三村の小母さんの死が突然で、まだ、実感が湧いて来ないのだった。

「私たち、なんという間抜でしょ。誰か、会社へ電話して、三村さんに知らせなくちゃあ」

ふみ子はいつもの癖のように、胸もとから抜いた針へ髪の油をつける仕種になっていた。

タクシーの運転手をしている三村啓助は、出番であった。

池上線戸越銀座の賑やかな商店街を出はずれた、この埃っぽい地帯に啓助たちが越して来てから六年はたっていた。

啓助が寛子と知りあったのは、浅草の松屋に近い簡易食堂であった。寛子は、そ

こに住み込んで、客の食事を運んだりしていた。流しの合間に不規則な食べものを採るせいか、啓助は慢性の胃弱に悩まされていた。

「姐さん、水を呉れ」

啓助は顔をしかめながら、食事のあとに、決って胃の薬を飲んだ。

「あんた、タクシーの運転手さんでしょ。弁当を作ってもらって、どこでも、時間になったら、食べるといいのよ」

「お生憎さま、まだ、弁当を作ってもらう相手がいないのさ。姐さん、作ってくれるかい」

眉のあいだが離れた感じの寛子は、少し上向き加減になって、

「なんなら、わたし、作ってあげてもいいよ」

と、無造作に答えた。

啓助が寛子の名を知ったのは、弁当を頼んだときであった。

埼玉の田舎で生れた啓助が、東京へ出て働くようになってから、寛子のように素

直に口のきけた女はいなかった。

こざっぱりとした着物をきて、人のよさそうなところに啓助はひかれたらしかった。

寛子の渡してくれる弁当を、人通りの少ない通りにとめた車の中で開くとき、啓助は独り者でないような、淡い仕合せを感じた。

「秋風のころからで、よかったですね。弁当のおかずがいたみませんもの」

寛子は、感情の動きが、あまり現われない平べったい顔をしていた。

啓助が、寛子を誘って、浅草の映画館へはいったりした。寛子の月に二回の休日と、啓助の休みが、都合よく重なる日を待ち遠しく思うようにもなっていた。

隅田公園を歩いていたとき、川からの夜風が寛子の着物の裾を乱した。あらっと小さい声をあげて、寛子は、しゃがんだ。啓助が手を貸して、引きあげると、そのまま、寛子は縋りついてきた。人肌の恋しくなる冷い風が、抱きあっている二人を吹き抜けて行った。

「わたし、とても、しあわせよ」
こんな、ありきたりでない、もっと、いい言いかたがないものかしらと寛子は思ったりした。
「どうだ、いっしょに暮さないか」
啓助は怒ったように言って、買い代えたばかりの新しい靴先きのあたりを見ていた。
「わたし、どんな女か知ったら、いやになるに決っています。このままでいたほうが、長続きするような気がしますよ」
逢ったときから、啓助のほうが十ぐらいは年下だろうと寛子は考えてもいた。
「あんた、いくつ」
「二十四だ」
「それじゃあ、あんたの内儀さんになるなんて無理よ。わたし、三十一になったもの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com